小学生における対人的感謝の研究(1)

【目的】
しかしながら、本邦において児童を対象とした感謝に関する心理学的研究はほとんど存在しない。小学校高学年を対象とした自由記述調査の結果、小学校においては、主に対人的場面において感謝感情が生起することが示されている(藤原・村上・西村・渡谷・桜井、2013)。以上より本研究では、小学校における対人的感謝を測定する尺度を開発することを目的とする。さらに、基礎資料として尺度内的一貫性を確認するとともに、感謝尺度得点における性差ならびに学年差の有無を検討することを第二の目的とする。

【方法】
調査対象者 小学4年生から6年生1,050名(男子527名、女子523名)を対象とした。
調査方法 各学級担任が以下の内容の質問紙を配布・回収した。
対人的感謝尺度の作成 対人的感謝尺度の作成方法(GQ-6(McCullough et al., 2002)やGRAT(Watkins et al., 2003)を参考に、博士課程において心理学を専攻する大学院生3名が、他者に対する感謝感情を表現する8項目を作成した。具体的には、「ふだんの生活の中で、まるでのひょうに感謝することがたくさんあります。」「他の人に感謝することを書き出したら、たくさん書けます。」などであった。各項目について、「あてはまる(4点)」、「どちらかといえばあてはまる(3点)」、「どちらかといえばあてはまらない(2点)」、「あてはまらない(1点)」の4件法で回答を求めた。

【結果と考察】
対人的感謝尺度の主成分分析 対人的感謝を測定する8項目について、主成分分析を行った。その結果、第1主成分への寄与率は63.40%であった。いずれの項目についても、第1成分に対して50以上の高い主成分负荷量を示した。

【まとめと今後の課題】
本研究の目的は、小学校児童を対象とした対人的感謝尺度を開発し、基礎資料として性差ならびに学年差の有無を検討することであった。主成分分析ならびに確認的因子分析の結果、8項目によって構成される対人的感謝尺度が開発された。また、2要因分散分析の結果、本尺度によって測定された対人的感謝感情には性差が認められ、女子の得点が男子の得点よりも有意に高かった。今後は、本尺度の妥当性を確認するとともに、本尺度を用いた感謝と心理・社会的適応感の関連の検討や、感謝を用いた適応向上に関する実践における、本尺度を用いた効果測定への応用が期待される。